

# 現代語訳 パーリ受戒健度

## —— 第一——第六章 ——

武 田 龍

### はじめに

#### (一) パーリ聖典と口承文芸

原始仏教聖典は、口誦によって伝承された聖典である。記憶のうちから取り出し口に出して誦え、それを聞いて胸中に蔵め保持する。この方法で連綿と語り伝えられた聖典である。それゆえ原始仏教聖典は記憶しやすく誦えやすい文学形式をもつ。つまり口承文芸特有の様式をもつ。その様式は、語り口として現れる。口誦伝承された聖典は、まず口承文芸として取り扱われねばならない。

訳者はすでにパーリ受戒健度を口承文芸の様式面から調査した<sup>(1)</sup>。文書化された口承文芸を読む時、違和感を覚えることの一つに、文中にあって特に意味らしい意味をもたない語句の頻出多用がある。例を挙げれば、

atha *じまら* kho *じま*。ナルタース『パーリ語辞典』R. C. Childers: A Dictionary of the Pali Language. (London 1875. Reprint Tokyo 1977) の "KHO" の項 (二〇一頁) には 'Indeed' の訳語を挙げて幾つかの例文を掲げた後、'Very frequently used as the second or third word of a sentence, without any special meaning, or where we should use the conjunction "and" 'とこの説明を載せる。Pali-English Dictionary (PTS. London) は 'an enclitic particle of affirmation & emphasis: indeed, really, surely' と説明する。両辞書とも kho の語に前接語として強調の役割を果たす以外には大した意味を認めていない。atha の語も繫辞として使われるが大した意味はない。atha も kho も文脈を押さえれば、内容理解のためにはなくとも構わない語として、翻訳の際にはほとんど無視される。訳文にはその痕跡すら残らない語である。

この二語が連結した *atha kho* の句にも意味らしい意味は見られない。意味らしい意味を持たない句が何のために使われるのか。訳者は、パーリ受戒度を口承文芸の様式面から調査した時に、ポイントはその句が置かれた位置にあることに気づいた。この仏伝を *atha kho* の位置で区切ってみると、仏伝の各エピソードの内容的まとまりと *atha kho* の配置とが対応した関係にあることを知った。*atha kho* が配置されることによって、それ以前とは異なるまとまりをもつ話が始まっており、特に時を特定し強調する場合には *tena kho pana samayena* 「その時」の句が配置されていることがわかった。*atha kho* の配置は、新しい段落が設定されたことを知らせるものとみてよい。

このように、*atha kho* という句は、その位置において話を区切り段落をつけるという重要な役割を果たしており、意味を持つ代わりに、段落区切り装置として機能しているのである。

訳者は、*atha kho* のもつ口誦機能に着目し、これまでにパーリ受戒度第二五―七九章をはじめ幾つかのパーリ聖典の現代語訳を試みた<sup>2)</sup>。その結果、口誦により伝承された原始仏教聖典における *atha kho* の句の果たす口誦機能を確認できた。

## (二) パーリ受戒度第一―十六章

ここに掲載するのは、仏伝部分にあたる前半部のうち第一―十六章の翻訳である。口承文芸の様式研究の成果を援用して、原文に忠実に現代語

訳した。

パーリ受戒度には、すでに『南伝大蔵経』第三卷（一九三八年初版）所収の渡邊照宏博士によるすぐれた翻訳がある。また、いわゆる仏伝部分にあたる前半部（第一―二四章。The Vinaya Pitakan vol. I. pp. 1-4）には、前田恵學博士による明快な現代語訳「ブツダの開戒―マハーヴァッガー」（『世界文学大系4 インド集』筑摩、一九五九年）と、畝部俊英訳「成道から伝道へ（律蔵・大品一―二四）」（『原始仏典一、ブツダの生涯』講談社、一九八五年）がある。

パーリ受戒度の冒頭に収められた仏伝は、仏伝としては最古のもの一つであり、最も有名なもの一つである。それは仏伝としての完成態の一つを示している。

そこには、釈尊の成道から初転法輪、出家の仏弟子と在家の仏弟子の誕生、仏・法・僧の三宝の確立による仏教サンガの成立、伝道の宣言、三帰依による受戒入団規定の由来、異教徒との神通競べ、マガダ王ビンビサーラ（頻婆娑羅）の帰依と竹林精舎の布施、サーリプッタ（舍利弗）とモッガッラーナ（目連）の帰依という出来事が綴られる。いずれをとっても仏教教団が成立し発足する時期に起こった極めて重大な出来事ばかりである。これらは、仏弟子にとっては綺羅星の輝くとき珠玉のような出来事であり、仏教教団内で大きな感動をもって語り伝えられたに違いない。

すなわち、釈尊の開悟成道という個人的体験から始まり、伝道という

他者への働きかけが行われたこと、釈尊の体験を理解した人あるいは理解しようとする人たちが出家して入門したことにより比丘サンガ（教団）が成立したこと、サンガは続々と新規入団者を受け入れたこと、が語られる。舍利弗と目連の帰仏に至るまで、最初期の仏教教団における重大事を列挙する。

なかでも、第一章から第六章は、成道から初転法輪への展開を語り、仏伝文学中の白眉ともいえる部分である。しかも成道後の釈尊の心境の変化を描くという極めて異例の内容である。釈尊の説法は八万四千の法門と言われるほど数多く伝えられているが、釈尊自身の心境の劇的変化を伝えるものは他にはない。

正覚を得て仏陀となった釈尊は、あらゆる煩惱を消し去り迷いを離れ、解脱した喜びに浸る。しかし、そのうちに、仏陀の心の奥底からふつふつと湧き上がる疑問によって、解脱の喜びは消え去る。聖典は、仏陀の胸の奥に湧き起こる疑問・躊躇・逡巡などを伝え、それが梵天の懇願によって劇的に転換されて、釈尊が説法を決意するに至る経緯を描く。

最初の説法は、かつて苦行に取り組んだ頃の修行仲間の五比丘に対して行われた。釈尊の初転法輪である。それを聞いた五比丘は、即座に理解したわけではない。暫く時間をかけて漸次に内容を理解した。そして釈尊のもとでの修行を望み、出家受戒を申し出て入門が許される。受戒は入門の手続きとして行われ、その結果、仏教の比丘サンガはこの世に初めて成立した。仏教の比丘サンガ（教団）の成立時の事情は、このよ

うなものであり、以降、受戒は仏教サンガへ入団するための必須の手続きとされたことを伝える。

口承文芸は、創作文学とは違って、単純な構造を好み、華美な文章を用いない。この特性をふまえ、現代日本語の敬語表現の「られる」「される」等と受け身表現の「られる」「される」等との混同を避けるために、本稿では釈尊に対する敬語表現は、必要最小限のものにとどめた。

依用した原本は、H. Oldenberg: *The Vinaya Pitakam* vol. I, (PTS, 1969) である。

### 〈凡 例〉

- 一、本文の行頭に付した丸数字は、訳者がこの翻訳にあたって採用した区分方式による段落を示す。
- 一、本文中の「」は訳者が補足したもの。（）は訳者による説明。
- 一、本文中の……（略）……は原本の本文中に省略されている箇所を表す。
- 一、本文の右脇に付した（）内の数字は註記を表し末尾に掲げる。
- 一、本文の右脇に付した「」の算用数字は原本 (PTS) のパラグラフナンバーを示し、本文上部に付した算用数字は原本の頁数を示す。
- 一、仏教の教理などを表す用語として漢訳語が確立定着しているものは、漢訳語をそのまま用いた。

〈第一章〉

1 ① 世尊<sup>[三]</sup>は、ウルヴェーラー村におられる時に仏陀<sup>[四]</sup>となられ、ネーランジャラー川の畔にある菩提樹の下で初めて現等覺<sup>[五]</sup>された。

② *atha kho* 世尊は、菩提樹の下でひとたび結跏趺坐したまま七日間坐り続け、解脱の樂を享けた。

③ *atha kho* 世尊は、夜の始めに、縁起を正逆の順に従って熟考した。「無明<sup>[六]</sup>に縁<sup>[七]</sup>って行があり、行に縁<sup>[七]</sup>って識があり、識に縁<sup>[七]</sup>って名色があり、名色に縁<sup>[七]</sup>って六処があり、六処に縁<sup>[七]</sup>って触があり、触に縁<sup>[七]</sup>って受があり、受到縁<sup>[七]</sup>って愛があり、愛に縁<sup>[七]</sup>って取があり、取に縁<sup>[七]</sup>って有があり、有に縁<sup>[七]</sup>って生があり、生に縁<sup>[七]</sup>って老死・憂・悲・苦・愁・惱が生ずる。このように、このすべての苦のかたまり（苦蘊<sup>[八]</sup>）は生起<sup>[七]</sup>する。しかし、無明<sup>[六]</sup>をこそ残りなく離貪によって滅すれば、行は滅する。行を滅すれば識は滅する。識を滅すれば名色は滅する。名色を滅すれば六処は滅する。六処を滅すれば触は滅する。触を滅すれば受は滅する。受を滅すれば愛は滅する。愛を滅すれば取は滅する。取を滅すれば有は滅する。有を滅すれば生は滅する。生を滅すれば老死・憂・悲・苦・愁・惱は滅する。このように、このすべての苦のかたまりは滅する」と。

④ *atha kho* 世尊は、この意味を知って、その時このウダーナを唱えた。

「熱心に禪定しているバラモン<sup>[十]</sup>に諸法が現れる時、彼の一切の疑惑は消滅する。（彼は）原因を有するという法を知るから」と。

⑤ *atha kho* 世尊は、夜の中頃に縁起を正逆の順に従って熟考した。「無明に縁<sup>[七]</sup>って行があり、行に縁<sup>[七]</sup>って識があり、識に縁<sup>[七]</sup>って名色があり、……（略）……このように、このすべての苦のかたまりは生起する。……（略）……滅する」と。

⑥ *atha kho* 世尊は、この意味を知って、その時このウダーナを唱えた。「熱心に禪定しているバラモンに諸法が現れる時、彼の一切の疑惑は消滅する。（彼は）諸々の縁の滅尽を知ったから」と。

⑦ *atha kho* 世尊は、夜の終わり頃に縁起を正逆の順に従って熟考した。「無明に縁<sup>[七]</sup>って行があり、行に縁<sup>[七]</sup>って識があり、……（略）……このように、このすべての苦のかたまりは生起する。……（略）……滅する」と。

⑧ *atha kho* 世尊は、この意味を知って、その時このウダーナを唱えた。「熱心に禪定しているバラモンに諸法が現れる時、彼は魔の軍勢を破りつつ立つ。あたかも虚空を照らす太陽のごとく」と。

——菩提樹の章 終わり

## 〈第二章〉

① <sup>[1]</sup> *atha kho* 世尊は、七日を過ぎて後、その三昧から立ち上がり、菩提樹の下からアジャパーラニグロダ樹のところへ近づいた。近づいて、アジャパーラニグロダ樹の下でひとたび結跏趺坐したまま七日間坐り続け、解脱の樂を享けた。

② <sup>[1]</sup> *atha kho* 一人のフンフンと威張っているバラモンが世尊に近づき、近づいて、世尊と挨拶を交わし、親しく礼儀正しい言葉を交わして一隅に立った。一隅に立ったそのバラモンは世尊にこう言った。「ゴータマさん、どういふ点からバラモンであるというのか？ また、バラモンとなる最も優れた方法とは何か？」と。

③ <sup>[1]</sup> *atha kho* 世尊は、この意味を知って、その時このウダーナを唱えた。

「もしバラモンであって、悪法を拒み、フンフンと威張らず、汚れなく、自制し、ヴェーダの奥義を究め、梵行を完成し（天人で）、その高ぶりがこの世のどこにもないような（その）人は、法に適ったバラモンであり、梵の言葉を語ることができる」と。

——アジャパーラ樹の章 終わり

## 〈第三章〉

① <sup>[1]</sup> *atha kho* 世尊は、七日を過ぎて後、その三昧から立ち上がり、アジャパーラニグロダ樹の下からムチャリンダ樹のところへ近づいた。近づいて、ムチャリンダ樹の下でひとたび結跏趺坐したまま七日間坐り続け、解脱の樂を享けた。

② <sup>[1]</sup> *tena kho pana samayena*（その時）不意に大きな雲が起り、七日間雨が降り、寒風吹きすさぶ悪天候だった。

③ *atha kho* ムチャリンダ竜王は、自分の棲みかより出て、世尊の身体を七重のとぐろに巻いて、頭の上に大きな鎌首を持ち上げて覆った。「世尊に寒さ（による患い）がないように、世尊に暑さ（による患い）がないように、世尊に虻・蚊・風・炎熱・蛇の触れること（による患い）がないように」と。

④ <sup>[1]</sup> *atha kho* ムチャリンダ竜王は、七日を過ぎて後、雲も去り、天空が晴れ渡ったのを見て、世尊の身体からとぐろを解き、自分の姿を捨て、青年の姿を化作して、合掌して世尊を礼拝しつつ、世尊の前に立った。

⑤ <sup>[1]</sup> *atha kho* 世尊は、この意味を知って、その時このウダーナを唱えた。

「独りでいることは楽しい。満足し、法を聞き、見る人にとっては。

世間に対して害心ないことは楽しい。生き物に対する抑制は（楽しい）。

世間において貪欲を離れることは楽しい。それは諸欲の超越である。我慢の調伏ということ、これは実に最上の樂である」と。

——ムチャリンド樹の章 終わり

〈第四章〉

① <sup>[一]</sup> atha kho 世尊は、七日を過ぎて後、その三昧から立ち上がり、

ムチャリンド樹の下からラージャーヤタナ樹のところへ近づいた。近づいて、ラージャーヤタナ樹の下でひとたび結跏趺坐したまま七日間坐り続け、解脱の樂を享けた。

② <sup>[二]</sup> tena kho pana samayena （その時）タブッサとバツリカという二人の商人が、ウッカラー村からその地へと向かって進んでいた。

③ <sup>[三]</sup> atha kho タブッサとバツリカという二人の商人の親族血縁者である神（のごとき人）が、タブッサとバツリカという二人の商人にこう言った。「君たち、ラージャーヤタナ樹の下におられるあれなる世尊は、初めて現等覚された。行って、あの世尊に麦菓子と蜜団子とをさし上げよ。それは長く君たちの利益安樂となるにちがいない」と。

④ <sup>[四]</sup> atha kho タブッサとバツリカという二人の商人は、麦菓子と蜜団子とを持って世尊のところへ近づいた。近づいて、世尊に挨拶し一隅

に立った。一隅に立ったタブッサとバツリカという二人の商人は世尊にこう言った。「尊師よ、世尊は我らの麦菓子と蜜団子とをお受け下さい。それは長く我らの利益安樂となるでありますよ」と。

⑤ <sup>[五]</sup> atha kho 世尊はこう思った。「如来たる者たちは、手では受けない。私はどのようにして麦菓子と蜜団子とを受ければよいのか？」と。

⑥ <sup>[六]</sup> atha kho 四大天王は、世尊の心のうちを心によって知り、四方より四つの石鉢を世尊に手渡した。「尊師よ、世尊はこれに麦菓子と蜜団子とをお受け下さい」と。世尊は新しい石鉢に麦菓子と蜜団子とを受け、受けて食べた。

⑦ <sup>[七]</sup> atha kho タブッサとバツリカという二人の商人は、世尊が鉢から手を離れたのを見て、世尊の両足に頭をつけて礼拝して、世尊にこう言った。「尊師よ、これなる我らは、世尊に帰依します。法にも帰依します。世尊は、我らを在家信者（ウパーサカ）として受け入れたまえ。今日より命ある限り帰依します」と。彼らは、この世で初めて二帰依を唱えたウパーサカとなった。

——ラージャーヤタナ樹の章 終わり

〈第五章〉

① <sup>[一]</sup> atha kho 世尊は、七日を過ぎて後、その三昧から立ち上がり、ラージャーヤタナ樹の下からアジャパーラニグロダ樹のところへ近づ

いた。近づいて、世尊はまさにそのアジャパーラニグロダ樹の下にいた。

② <sup>[一]</sup> alha kho 静かに独坐する世尊の心に一つの思いが浮かび上がった。「私が得たこの法は深遠で見難く、難解であり、静まり、至妙で、推理の域を超え、微妙で、賢者のみよく知るところのものである。(この世の)人々は、愛着を好み、愛着を樂しみ、愛着を喜ぶ。愛着を好み、愛着を樂しみ、愛着を喜ぶ人々にとって、この道理つまり【これによってあるという性質】すなわち【縁起<sup>[二]</sup>】は見難い。一切万物は静まり、あらゆる執着は捨てられ、欲望の滅尽、離貪、滅尽、涅槃というこの道理は極めて見難い。だから私が法を説くとしても、他の人々が私を理解できなければ、私は疲れるだけだ。私は悩むばかりだ」と。

世尊に未だかつて聞いたことのないこの不思議な偈が現れた。

「困苦して私が得たものを今や説くべき要なし。

貪欲や怒りに負けた人々には、この法は極めてさとりに難い。

(その法は)世の流れに逆らい、微妙で深遠で見難く、微細であり、

貪欲に染まり闇黒に覆われた人々には見えない」と。

③ <sup>[四]</sup> alha kho 世界の主である梵天は、世尊の心のうちを心によって知り、こう思った。「ああ、この世は潰れる。ああ、この世は滅びる。如来・阿羅漢・正等覚者の心が何もしない方に傾き、説法しようと思わなかった。

④ <sup>[五]</sup> alha kho 世界の主である梵天は、世尊の心のうちを心によって知り、こう思った。「ああ、この世は潰れる。ああ、この世は滅びる。如来・阿羅漢・正等覚者の心が何もしない方に傾き、説法しようと思わ

ないかぎりは」と。

④ <sup>[五]</sup> alha kho 世界の主である梵天は、あたかも力ある人が曲げた腕を伸ばし、伸ばした腕を曲げるように、梵天界で姿を消して、世尊の前に現れた。

⑤ <sup>[六]</sup> alha kho 世界の主である梵天は、上衣を一肩にし、右の膝を地に着け、世尊に向って合掌して、世尊にこう言った。「尊師よ、世尊は法をお説きください。善逝は法をお説きください。(この世には心の)汚れの少ない人々があり、(彼らは)今は法を聞いていないので衰退しています(聞けば)法を理解する者となりましょう」と。

世界の主である梵天は、こう言った。こう言って、さらにまたこう言った。

「かつてマガダの人々の間に現れたのは、汚れある人々によって考えられた不浄の法でした。

その不死の門を開き、汚れない人によってさとられた法をお聞かせください。

あたかも山頂の岩の上に立ち、遍く人々を見るように、

智慧のすぐれた普く見る眼のある人よ、真理からなる高殿に登り、憂いに沈み、生老に悩む人々を見て下さい。(あなたはすでに)憂

いを離れておられる。  
起ち上がれ、英雄よ、戦勝者よ、隊商主よ、負債無き人よ、この世を歩んでください。

世尊は、法をお説きください。(聞けば)理解する者となりましよう」と。

<sup>△</sup>このように言われて、世尊は世界の主である梵天にこう言った。「梵天よ、私はこう思った。『私が得たこの法は深遠で見難く、難解であり……(略)……私は悩むばかりだ』と。梵天よ、私に未だかつて聞いたことのない不思議な偈が現れた。『……(略)……闇黒に覆われた人々には見えない』と。梵天よ、このように、私は深慮して、心は何もしない方へ傾き、説法しようとは思わない」と。

<sup>五</sup>再び、世界の主である梵天は、世尊にこう言った。「尊師よ、世尊は法をお説きください。……略……理解する者となりましよう」と。

再び、世尊は世界の主である梵天にこう言った。「梵天よ、私はこう思った。『私が得たこの法は深遠で見難く、難解であり……略……私は悩むばかりだ』と。梵天よ、私に未だかつて聞いたことのないこの不思議な偈が現れた。『……(略)……闇黒に覆われた人々には見えない』と。梵天よ、このように、私は深慮して、心は何もしない方へ傾き、説法しようとは思わない」と。

<sup>十</sup>三たび、世界の主である梵天は、世尊にこう言った。「尊師よ、世尊は法をお説きください。……(略)……理解する者となりましよう」と。

<sup>⑥</sup> *atha kho* 世尊は梵天の懇願を知って、衆生への憐れみの情によって、仏眼をもって世間を観察した。世尊は、仏眼をもって世間を観察し、衆生の中には、汚れの少ない者、汚れの多い者、鋭利な能力を持つ者、

軟弱な能力を持つ者、容貌の好い者、容貌の悪い者、教導し易い者、教導し難い者があり、一部には、来世と罪過への恐れを知って暮らしている者があることを見た。

<sup>十一</sup>たとえば、青蓮池・紅蓮池・白蓮池において、一部の青蓮・紅蓮・白蓮は水中に生じ、水中に生育し、水中に伸び、水中に沈んだまま繁茂し、一部の青蓮・紅蓮・白蓮は水中に生じ、水中に生育し、水面にまで達し、一部の青蓮・紅蓮・白蓮は水中に生じ、水中に生育し、水面より超えて立ち、水によって汚されないように。

<sup>十二</sup>このように、世尊は、仏眼を持って世間を観察し、衆生の中には、汚れの少ない者、汚れの多い者、鋭利な能力を持つ者、軟弱な能力を持つ者、容貌の好い者、容貌の悪い者、教導し易い者、教導し難い者があり、一部には、来世と罪過への恐れを知って暮らしている者があることを見た。見て、世界の主である梵天に偈をもって話しかけた。

「耳ある者よ、不死の諸門は開かれた。(誤った)信仰を捨てよ。

梵天よ、私は、思い悩み、人々に賢く優れた法を説かなかった」と。

<sup>十三</sup><sup>⑦</sup> *atha kho* 梵天は、「私は世尊によって法が説かれる機会をつくることができた」と世尊に挨拶して、右遶し、その場で姿を消した。

——梵天勸請の章 終わり

## 〈第六章〉

- ① <sup>[一]</sup> atha kho 世尊はこう思った。「私は最初の説法を誰に説けばよいのか？ 誰がこの法を速やかに理解するであろうか？」と。
- ② atha kho 世尊はこう思った。「あのアーラーラ・カーラーマは、賢く聡明で智慧があり、長らく汚れが少ない部類の人である。私はアーラーラ・カーラーマに最初の説法を説くことにしよう。彼なら、この法を速やかに理解するであろう」と。
- ③ <sup>[二]</sup> atha kho 姿を隠した神が世尊に告げた。「尊師よ、アーラーラ・カーラーマは死後七日になります」と。世尊にも、「アーラーラ・カーラーマは死後七日になる」という智が生じた。
- ④ atha kho 世尊はこう思った。「アーラーラ・カーラーマは惜しいことをした。もし彼がこの法を聞けば、速やかに理解するであろう」と。
- ⑤ <sup>[三]</sup> atha kho 世尊はこう思った。「私は最初の説法を誰に説けばよいのか？ 誰がこの法を速やかに理解するであろうか？」と。
- ⑥ atha kho 世尊はこう思った。「あのウッタダカ・ラーマプッタは、賢く聡明で智慧があり、長らく汚れが少ない部類の人である。私はウッタダカ・ラーマプッタに最初の説法を説くことにしよう。彼なら、この法を速やかに理解するであろう」と。

⑦ <sup>[四]</sup> atha kho 姿を隠した神が世尊に告げた。「尊師よ、ウッタダカ・ラーマプッタは昨夜命終しました」と。世尊にも、「ウッタダカ・ラーマプッタは昨夜命終した」という智が生じた。

⑧ atha kho 世尊はこう思った。「アーラーラ・カーラーマは惜しいことをした。もし彼がこの法を聞けば、速やかに理解するであろう」と。

⑨ <sup>[五]</sup> atha kho 世尊はこう思った。「私は最初の説法を誰に説けばよいのか？ 誰がこの法を速やかに理解するであろうか？」と。

⑩ atha kho 世尊はこう思った。「あの五比丘<sup>[五]</sup>には大いに助けられた。彼らは自ら努力精進して私に仕えてくれた。自らすすんで（苦行する）私の世話をしてくれた。私は五比丘に最初の説法を説くことにしよう」と。

⑪ <sup>[六]</sup> atha kho 世尊はこう思った。「五比丘は今どこにいるのか？」と。世尊は、清らかにして常人を超えた天眼をもって、五比丘がバーラーナシーの（郊外にある）イシパタナミガダーヤ<sup>[六]</sup>にいることを見た。

⑫ atha kho 世尊は、ウルヴェーラー<sup>[七]</sup>に気のすむまで滞在してから、バーラーナシーへ向かって歩き始めた。アージーヴィカ<sup>[七]</sup>教徒のウパカは、世尊がガヤーと菩提樹の間の道を進んで行くのを見た。見て、世尊にこう言った。「友よ、君の五体は健康そのもの、皮膚の色は清浄で澆刺と<sup>[八]</sup>している。友よ、君は誰について出家したのか？ 君の師は誰か？ 君は誰の法を奉じているのか？」と。こう言われて、世尊はアージーヴィカ<sup>[八]</sup>

教徒のウパカに偈をもって話した。

「私はすべてに打ち克った者、すべてを知った者、あらゆるものに執着なく、すべてを捨て、欲望を滅尽し解脱した。

自らさとしたものであるから、誰をか師と言いえようか。

私に師はいない。私に等しい者はいない。

天上界にもこの世にも私に比肩する者はない。私こそはこの世の阿羅漢であり、私は無上の師である。

私は唯一の正等覚者であり、私は（煩惱の燃え盛る熱から）冷めて涅槃に達した。法輪を転ずるために、私はカーシーの人々の町へ行

く。

盲闇の（ごとき）この世で、私は不死の太鼓を打つ」と。

「ウパカは言った」「友よ、君は（自分が）無限の勝者に値すると公言するのですね」と。

「世尊は偈をもって答えた」

「煩惱を滅し尽くした人々は、私に等しい勝者である。私は諸々の悪法に打ち克った。それ故に、ウパカよ、私は勝者なのだ」と。

このように言われて、アー जी विका教徒のウパカは、「友よ、あるいはそうかも知れませんか」と言って、頭を振って、別の道を取って去った。<sup>24</sup>

⑬<sup>[十]</sup> atha kho 世尊は、次第に遊行しつつバーラーナシーのイシパタ

ナ・ミガダーヤにいる五比丘のところへ近づいた。五比丘は世尊が遠くから近づいてくるのを見た。見て、互いに確かめた。「友よ、あの沙門ゴータマがやって来る。（彼は）贅沢者で、修行を棄て、贅沢に転落した。彼には挨拶してはならない。立って迎えてはならない。彼の鉢と衣とを受け取ってはならない。それでも坐る席だけは設けてやろう。望むなら坐るであろう」と。世尊が五比丘に近づくとつれ、その五比丘は自らの約束を守れず、世尊を出迎えて、一人は世尊の鉢と衣とを受け取り、一人は席を用意し、一人は足を洗う水・足台・足を拭く布を用意した。

世尊は用意された席に坐り、坐って世尊は両足を洗った。それから（五比丘は）世尊を名前で呼びかけ、また「友よ」という言葉で話しかけた。

このように言われて、世尊は五比丘にこう言った。「比丘たちよ、如来<sup>25</sup>を名前で呼びかけてはならない。また「友よ」という言葉で話しかけてはならない。比丘たちよ、如来は、阿羅漢であり、正等覚者である。比丘たちよ、耳を傾けよ。不死は得られた。私は教えよう。私は法を説こう。教えられたとおりに行うならば、久しからずして、良家の息子たちが正しく家から出て家なき身に出家した目的である無上の梵行の究極を、現世において、自ら（体験することではっきりと）知り、証明し、体得するであろう」と。このように言われて、五比丘は世尊にこう言った。「友、ゴータマよ、君はあの行によっても、あの修道（方法）によっても、あの苦行によっても、人間を超えた至聖にして殊勝な智見に到達できなかった。今や贅沢者で、修行を棄て、贅沢に転落した君がどうして

人間を超えた至聖にして殊勝な智見に到達できようか」と。<sup>〔十四〕</sup>このように言われて、世尊は五比丘にこう言った。「比丘たちよ、如来は賢沢者ではない、修行を棄てたのではない、賢沢に転落したのではない。比丘たちよ、如来は、阿羅漢であり、正等覚者である。比丘たちよ、耳を傾けよ。不死は得られた。私は教えよう。私は法を説こう。教えられたとおりに行うならば、久しからずして、良家の息子たちが正しく家から出て家なき身に出家した目的である無上の梵行の究極を、現世において、自ら知り、証明し、体得するであろう」と。再び五比丘は世尊にこう言った。……(略)……。再び世尊は五比丘にこう言った。……(略)……。10 三たび五比丘は世尊にこう言った。「友、ゴータマよ、君はあの行によっても、あの修道(方法)によっても、……(略)……至聖にして殊勝な智見に到達できようか」と。<sup>〔十六〕</sup>このように言われて、世尊は五比丘にこう言った。「比丘たちよ、君たちは、かつて私がこのように話したことが(一度でも)あったと記憶しているか?」と。「いいえ、尊師よ」と。「比丘たちよ、如来は、阿羅漢であり、正等覚者である。……(略)……体得するであろう」と。世尊は五比丘を説得することができた。

⑭ *atha kho* 五比丘はようやく世尊の話の聞こうと思ひ、耳を傾け、理解しようという気持ちになった。

⑮ *atha kho* 世尊は五比丘に説いた。「比丘たちよ、この二つの極端に出家した者は近づいてはならない。二つとは何か? 諸々の欲望における欲楽に耽ることは、下劣で卑しく、凡夫の所行で、聖にあらず、

(出家の) 目的に適わない。また、自ら(苦行して) 疲勞困憊すること  
は、苦しいだけで、聖にあらず、(出家の) 目的に適わない。比丘たち  
よ、この二つの極端を離れて、如来は中道を完全にさとった。それは、  
眼を開き、智慧を生じ、心の静まり、すぐれた智慧、さとり、涅槃へと  
向かうものである。比丘たちよ、如来が完全にさとった、眼を開き、智  
慧を生じ、心の静まり、すぐれた智慧、さとり、涅槃へと向かう中道と  
は何であるのか? これこそ聖八正道である。すなわち、正見・正思・  
正語・正業・正命・正精進・正念・正定である。比丘たちよ、これが如  
来が完全にさとった中道であり、眼を開き、智慧を生じ、心の静まり、  
すぐれた智慧、さとり、涅槃へと向かうものである。比丘たちよ、これ  
こそが、苦についての聖なる真理(苦諦)である。生まれることも苦で  
ある。老いることも苦である。病気になることも苦である。死ぬことも  
苦である。怨み憎む者と会うことも苦である。愛しい者と別れることも  
苦である。求める物が得られないことも苦である。要するに五取蘊もま  
た苦である。比丘たちよ、これこそが、苦の生起する(原因についての)  
聖なる真理である(集諦)。それは、再生を促し、喜びと貪りを伴ない、  
ここかしこに喜びを求める渴愛というものである。すなわち、欲の渴愛、  
有の渴愛、無有の渴愛である。比丘たちよ、これこそが、苦の滅という  
聖なる真理(滅諦)である。つまり、渴愛を離貪によって残りなく滅し、  
捨て、捨て離れ、脱し、執着がなくなることである。比丘たちよ、これ  
こそが、苦の滅に至る道という聖なる真理(道諦)である。これこそが、

聖八正道である。すなわち、正見・正思・正語・正業・正命・正精進・  
 11正念・正定である。比丘たちよ、これが苦という聖なる真理である、と  
 かつて聞いたことのない法に対して、私には眼が開き、智が生じ、慧が  
 生じ、明智が生じ、光明が生じた。これが苦であるという聖なる真理を  
 遍く知るべきであると、比丘たちよ、私に……(略)……遍く知ったと、  
 比丘たちよ、かつて聞いたことのない法に対して、私には眼が開き、智  
 が生じ、慧が生じ、明智が生じ、光明が生じた。比丘たちよ、これが苦  
 の生起という聖なる真理である、と……(略)……光明が生じた。これ  
 が苦の生起という聖なる真理は断ずるべきであると、比丘たちよ、私に……  
 (略)……断じたと、比丘たちよ、私に……(略)……光明が生じた。  
 比丘たちよ、これが苦の滅という聖なる真理である、と私に……(略)……  
 光明が生じた。この苦の滅という聖なる真理はさとるべきであると、比  
 丘たちよ、私に……(略)……さとしたと、比丘たちよ、私に……(略)  
 ……光明が生じた。比丘たちよ、これが苦の滅に至る道であるという聖  
 なる真理であると、私に光明が生じた。この苦の滅に至る道という聖な  
 る真理は修習すべきであると、比丘たちよ、私に……(略)……修習し  
 たと、比丘たちよ、私に光明が生じた。比丘たちよ、私にとって、この  
 四つの聖なる真理をこのように三回転じ十二の様相に現わして(三転十  
 二行相させて)、如実にはたらく智見が極めて清浄になるまでは、私は、  
 比丘たちよ、神を含み悪魔を含み梵天を含む世界において、沙門・バラ  
 モンを含み神と共なる人間の世界において、無上なる正しいさとりを完

全にさとした、とは言わなかった。比丘たちよ、私にとって、この四つ  
 の聖なる真理をこのように三回転じ十二の様相に現わして、如実にはた  
 らく智見が極めて清浄になったので、私は、比丘たちよ、神を含み悪魔  
 を含み梵天を含む世界において、沙門・バラモンを含み神と共なる人間  
 の世界において、無上なる正しいさとりを完全にさとした、と言った。  
 私に智見が生じた。「私の心解脱は不動である。これが最後の生である。  
 22もはや再生はない」と。世尊はこれを語った。五比丘は歓喜し、世尊の  
 所説を大いに喜んだ。そして、このヴェイヤーカラナが説かれた時、尊  
 者コーンダンニャに遠塵離垢の法眼が生じた。「およそ生起するものは、  
 すべて滅するものである」と。世尊が法輪を転じている時、地居天の神々  
 12は声を挙げた。「このように、世尊によって、バーラーナシーのイシパ  
 タナ・ミガダーヤにおいて転じられた無上の法輪は、沙門によってもバ  
 ラモンによっても神によっても悪魔によっても梵天によっても、あるいは  
 この世のいかなるものによっても反転できない」と。地居天の神々の  
 声を聞いて四大天王は声を挙げた。……(略)……四大天王の声を聞い  
 て三十三天の神々が……(略)……ヤーマ天の神々が……(略)……兜  
 率天の神々が……(略)……化乐天の神々が……(略)……他化自在天  
 の神々が……(略)……梵衆天の神々が声を挙げた。「このように、世  
 尊によって、バーラーナシーのイシパタナ・ミガダーヤにおいて転じら  
 れた無上の法輪は、沙門によってもバラモンによっても神によっても悪  
 魔によっても梵天によっても、あるいはこの世のいかなるものによつて

も反転できない」と。<sup>〔三十一〕</sup> 実にこの刹那、この時刻、この瞬間に、(その) 声は梵天界にまで達した。そして、この十千世界は震え、震動し、大いに震動した。そして、無量の広大な光明がこの世に現われ、神々の威力を凌駕した。

⑮ *atha kho* 世尊は、このウダーナを唱えた。

「実にコーンダンニャはさとった。実にコーンダンニャはさとった」と。

ゆえに、この尊者コーンダンニャには、「さとれるコーンダンニャ」の名前がついた。

⑯ <sup>〔三十二〕</sup> *atha kho* 尊者さとれるコーンダンニャは、すでに法を見て、法を得て、法を知って法を深く理解して、疑惑を脱し、疑惑を離れ、無畏を得て、師の教えにおいて他に依存することなく、世尊にこう言った。

「尊師よ、私は世尊のもとで出家したい、受戒したいと望みます」と。

「来たれ、比丘よ<sup>〔三十三〕</sup>」と世尊は言った。「法はよく説かれた。正しく苦を終わらせるために梵行を行なえ」と。これがその尊者の受戒であった。

⑰ <sup>〔三十四〕</sup> *atha kho* 世尊は、その他の比丘たちに法を説いて教え導いた。

⑱ *atha kho* 世尊が法を説いて教え導いている時に、尊者ヴァッパと尊者パッディヤとに、遠塵離垢の法眼が生じた。「およそ生起するものは、すべて滅するものである」と。<sup>〔三十五〕</sup> 彼らは、すでに法を見て、法を得て、法を知って、法を深く理解して、疑惑を脱し、疑惑を離れ、無畏を得て、師の教えにおいて他に依存することなく、世尊にこう言った。

「尊師よ、我らは世尊のもとで出家したい、受戒したいと望みます」と。「来たれ、比丘たちよ<sup>〔三十六〕</sup>」と世尊は言った。「法はよく説かれた。正しく苦を終わらせるために梵行を行なえ」と。これがその尊者たちの受戒であった。

⑳ <sup>〔三十七〕</sup> *atha kho* 世尊は、托鉢によって得られた食物を食べるという方法で、その他の比丘たちに法を説いて教え導いた。(先にさとった) 三人の比丘が托鉢して、持ち帰る食物によって六人が生活するという方法である。

㉑ <sup>〔三十八〕</sup> *atha kho* 世尊が法を説いて教え導いている時に、尊者マハーナーマと尊者アッサジとに、遠塵離垢の法眼が生じた。「およそ生起するものは、すべて滅するものである」と。<sup>〔三十九〕</sup> 彼らは、すでに法を見て、法を得て、法を知って、法を深く理解して、疑惑を脱し、疑惑を離れ、無畏を得て、師の教えにおいて他に依存することなく、世尊にこう言った。

「尊師よ、我らは世尊のもとで出家したい、受戒したいと望みます」と。

「来たれ、比丘たちよ」と世尊は言った。「法はよく説かれた。正しく苦を終わらせるために梵行を行なえ」と。これがその尊者たちの受戒であった。

㉒ <sup>〔四十〕</sup> *atha kho* 世尊は、五比丘に語りかけた。「比丘たちよ、色は無我である。比丘たちよ、もしこの色が我<sup>〔四十一〕</sup>であるならば、この色が病気になることはないであろう。色において、『私の色はこのようであれ』、『私の色はこのようであるなかれ』ということができようであろう。比丘たち

よ、色は無我であるがゆえに、色は病気になる。色において『私の色はこのようであれ』、『私の色はこのようであるなかれ』ということができない。<sup>三十九</sup>受は無我である。比丘たちよ、もしこの受が我であるならば、この受が病気になることはないであろう。受において、『私の受はこのようであれ』、『私の受はこのようであるなかれ』ということができよう。比丘たちよ、受は無我であるがゆえに、受は病気になる。受において『私の受はこのようであれ』、『私の受はこのようであるなかれ』とすることができない。想は無我である。……(略)……行は無我である。比丘たちよ、もしこの行が我であるならば、この行が病気になることはないであろう。行において、『私の行はこのようであれ』、『私の行はこのようであるなかれ』とすることができよう。比丘たちよ、行は無我であるがゆえに、行は病気になる。行において『私の行はこのようであれ』、『私の行はこのようであるなかれ』とすることができない。<sup>四十一</sup>識は無我である。比丘たちよ、もしこの識が我であるならば、この識が病気になることはないであろう。識において、『私の識はこのようであれ』、『私の識はこのようであるなかれ』とすることができよう。比丘たちよ、識は無我であるがゆえに、識は病気になる。識において『私の識はこのようであれ』、『私の識はこのようであるなかれ』とすることができない。<sup>四十二</sup>比丘たちよ、君たちはこれをどう考えるか。色は常住か無常か?」と。「尊師よ、無常です」と。「では、無常なるものは、苦か楽か?」と。「尊師よ、苦です」と。「では、無常であり、苦であり、変化する性

質のものを、『これは私のものである』、『これは私である』、『これは私の我である』と考えることは正しいことであろうか?」と。「尊師よ、正しくありません」と。<sup>四十三</sup>受は……(略)……想は……(略)……行は……(略)……識は常住か無常か?」と。「尊師よ、無常です」と。「では、無常なるものは、苦か楽か?」と。「尊師よ、苦です」と。「では、無常であり、苦であり、変化する性質のものを、『これは私のものである』、『これは私である』、『これは私の我である』と考えることは正しいことであろうか?」と。「尊師よ、正しくありません」と。<sup>四十四</sup>それゆえに、比丘たちよ、過去・未来・現在のおよそ色というものは、内・外、粗・細、劣・優、遠・近いすべて色は、『これは私のものではない』、『これは私ではない』、『これは私の我ではない』、『これは私の我ではない』と、このように、これをありのままに見るべきである。<sup>四十五</sup>(過去・未来・現在の)およそ受というものは、……(略)……およそ想というものは、……(略)……およそ行というものは、……(略)……およそ行というものは、……(略)……過去・未来・現在のおよそ識というものは、内・外、粗・細、劣・優、遠・近いすべてであろうが、すべて識は、『これは私のものではない』、『これは私ではない』、『これは私の我ではない』と、このように、これをありのままに見るべきである。<sup>四十六</sup>比丘たちよ、このように見る多聞の聖弟子は、色からも厭離し、受からも厭離し、想からも厭離し、行からも厭離し、識からも厭離する。厭離すれば離貪する。離貪すれば解脱する。解脱の境地において、『私は解脱した』という智が生じる。『生は尽

きた。梵行は完成した。なすべきことはなした。輪廻して再びこの世に生を受けることはない』と知る<sup>四十七</sup>』と。世尊はこう言った。五比丘は喜び、世尊の所説を大いに喜んだ。そして、このヴェイヤーカラナが説かれた時、五比丘の心は、執着を離れ、煩惱から解脱した。

㉓ *tena kho pana samayena* (その時) この世に阿羅漢は六人となった。

第一誦品 (終わり)

註

(1) 武田龍「パーリ受戒健度仏伝にみる口誦機能」『前田惠學博士頌壽記念 佛教文化學論集』(山喜房 一九九一) 五一―七三頁。

(2) 武田龍「現代語訳『パーリ受戒健度―第二五―七九章―』」上『同朋学園佛教文化研究所紀要』第十四号(一九九二) 五五―七五頁。

同 「現代語訳『パーリ受戒健度―第二五―七九章―』」下『同朋大学佛教文化研究所紀要』第十五号(一九九四) 一一―二四頁。  
同 「聖求経の研究」『インド学密教学研究 宮坂宥勝博士古稀記念論文集』(法蔵館 一九九三) 二八九―四一六頁。

同 「現代語訳『サッチャカ大経』(真宗尾張同学会『名古屋教養』第九号、一九九四) 一一―一三九頁。

(3) 世尊 *bhagavant* (*bhaga-vant*) 幸運をもつ者。ここでは、釈尊に対する尊称として用いられる。釈尊のこと。仏の十号の一つ。如来の十号の一つ。

(4) 仏陀 *buddha* (√*budh*, pp.) ちとった、目覚めたこと、またその状態。ちとった人、覚者、仏陀、仏。仏教の開祖のこと。

(5) 現等覚 *abhisambuddha* (*abhisambujjhati*, pp.) 完全にちとったこと。

(6) 縁起 *paṭicca-samuppāda* なんらかの先行する条件があって生起すること。一切の存在を関係性によって生成もしくは消滅するものとして捉える存在論。ここでは十二支縁起説を掲げる。

無明 (*avijjā*) 根本的無知。無智。

行 (*saṃkārā*) 意志、意思。人間の精神はここから対象に対して能動に転ずる。過去の経験や生活の全体から形成される人間の意志、形成力。

識 (*viññāṇa*) 意識。対象の認識に基づき、判断を通して得られる意識。人間の心の営みとしての意識一般をいう。

名色 (*nāmarūpa*) 五蘊に同じ。名(精神的要素)と色(物質的要素)との集合による個人存在。精神と肉体をもつ個人存在。

識と名色との関係は、相依って立つ葦束に譬えて説明される。「二つの葦束は相依って立つ。そのように名色に縁って識があり、識に縁って名色がある。……もしその葦束の一つを取り去れば、他の一つは倒れる。そのように名色の滅に縁って識の滅があり、識の滅に縁って名色の滅がある。」(SN, vol. II, p. 112. *nalakalapiyaṇi*)

六処 (*saḍḍayatana*) 六根(人間の六つの感覚器官。眼・耳・鼻・舌・身・意)とその対象となる六境(色・声・香・味・触・法)とが出合い六識を生ずる場所の意。六根が六境をとらえ相交渉して六識を生ずるから六入とも。六つの感覚器官とその対象が相関係して認識の成立すること。

六根を六内処、六境を六外処といい、合わせて十二処という。六処と触と受と愛との関係は、「比丘たちよ、苦の生起とはどういうことか? 眼と色とに縁って眼識が生じ、その三つが結合して触がある。触に縁って受があり、受に縁って愛がある。比丘たちよ、これが苦の生起である。耳と声……、鼻と香……、舌と味……、身と触……、意と法とに縁って意識が生じ、……」(SN, vol. II, p. 72. *dukkha*)

触 (*phassa*) 根(感覚器官)と境(認識の対象)と識(認識作用)とが合すること。

- 受 (vedāna) 感覺。根 (感覺器官) と境 (認識の対象) との接觸を識 (認識作用) が受け止めて生じる苦・楽・不苦不樂などの感覺。
- 愛 (taṇhā) 喉の渴きに譬えられる欲望の激情。渴愛。好ましい対象への飽くなき欲望。
- 取 (upādāna) 執着
- 有 (bhava) 人間の生存、存在。
- 生 (jāti) 生まれること。この世に生を受けること。
- 老死・憂・悲・苦・愁・惱 (jarāmaraṇa sokaparidevadukkha-domanassupāyāsa)
- (7) 生起 *saṃudaya* (*saṃ-udv*「<sup>レ</sup>」) 集まって起ること、集起、原因。こゝまてが、縁起の順観。
- (8) 以下が縁起の逆観。
- ウターナ *udāna* 感興偈、自説経。仏陀が折に触れ感興に従って発した言葉。胸一杯に抱いた思いのたけを発露したもの。韻文の形にまとめられている。
- 小部 (*Khuddaka-nikāya*) の第三として収録されている。九分教の一つ。
- 語法も内容もともに古い要素を伝え、仏教聖典中の最古層に属するものと考えられる。
- ウターナ *udāna* の説明する散文 *bhagava etam atthaṃ viditva tāyaṃ velāyaṃ imaṃ udānaṃ udānesi*。「世尊は、この意味を知って、その時のウターナを唱えた。」が偈に先行することでその偈がウターナであると分かる。(前田惠學『原始仏教聖典の成立史研究』七二―七頁)
- (10) バラモン *brāhmaṇa* 司祭者。ヴェーダの権威に従い、ヴェーダ聖典類の学習や教授を行い、各種の祭祀を執行する。四姓制度(カースト)の最高位に位する。
- ここでは、文脈から見ればバラモンとは積尊のことである。積尊は開悟成道後の自分自身をバラモンと自覚していたことがわかる。第二章のウターナに「ヴェーダの奥義を究め」という言葉が現れる。
- (11) 梵の言葉を語る *brāhmaṇavādān vadēyya*  
この *brāhma* という語は、ヴェーダの最高神たる梵天かヴェーダの宗教家であるバラモンか、あるいは開悟成道を達成した仏陀か阿羅漢か、あるいは如来か、それとも「宇宙の最高真理たる梵に通じた」という意味の「尊貴な」「聖なる」「宗教的な」という形容詞と理解すればよいのか。
- 我慢 *asmiṃāna* 自我が存在すると思う慢心。我に執着する驕慢な心。註(36)を参照
- (12) この二偈は、一行(一聯)が十六シラブル(音節)、二行の合計が三十二シラブルとなり、シュローカ *śloka* という形式の韻文であることがわかる。
- インド文学の韻律 (*metre*) は、音節 (*akṣara*, シラブル) の数・*matra* (短母音を発音するのに要する時間) の数により大別され、長短の組み合わせにより多種に分類される。韻文といえども頭韻・脚韻というような韻をふむことはなく、中国の詩とは違って押韻法に縛られることはない。パーリ聖典などの原始仏典に多用されるのはシュローカという韻律である。シュローカは、インドのヴェーダ聖典に起源する韻律の *Vedic Anuṣṭubh* から発達した韻文の形式で、古典叙事詩に用いられる韻律として知られる。
- インド文学の詩は、四つのパターダ (*pāda*, 詩節、句) で構成される。シュローカでは四つのパターダを前二つと後二つに分け、前の二つのパターダをもつて一聯(一行)、後の二つのパターダをもつて一聯(一行)と考える。シュローカは全体で三十二のシラブルを持つため、一パターダは八シラブルとなる。八シラブルを一句とし、二句十六シラブルを一行、二行三十二シラブルを一偈とするという構造である。
- (岩本裕『サンスクリット文法綱要』一〇六頁)
- 韻律の分析 (*metrical scan*) には、一パターダの半分の四シラブルから成る半詩節 (*ardhapāda*) を一つの単位と考える。それぞれの半詩節を a, b, c, d と表示する。
- シュローカの特徴は、第五、第十三、第十四、第十五シラブルを除いて、大変な自由が認められることである。



この意味を持たせるために初期の仏教徒が案出した言葉が *tathāgata* という語であったのであろう、とこう理解を示すにこころめる。

チルダース『ペーリ語辞典』(pp. 498-9) では、"A sentient being (*satto*)" : 「有情」(感覚のある人、知覚力のある人、衆生) という語義を最初に示し、次に「仏陀」の意味を掲げる。*tathāgata* という語は、まず有情の意味で用いられた言葉であり、その後仏陀に對する尊称へと転用された、と説明する。尊称は「至高の存在」を指すものである。有情とは "one who goes in like manner" (このように行く人) すなわち "one who goes the way of all flesh, one who is subject to death, a mortal." (死にゆく者、死を宿命でけられてゐる者、死を免れない者) とこう語義を掲げる。

仏教文献に現われる *tathāgata* は、その語形から、*tathā+gata* あるいは *tathā+āgata* の複合語と想定される。まず副詞 *tathā* が後語の (*a*) *gata* に對して働く隣近積の複合語が作られ、さらに有財積となつた複合語と考えられる。

そのため、*tathāgata* には、*tathā+gata* (真如に到達し真如に没入した人。如に向つて行く人) と、*tathā+āgata* (真如から来生した人。如から来た人) との二義が考えられる。*gata* (*v*gam, pp.) と *āgata* (*ā*-*v*gam, pp.) とは、「行く」と「来る」という動作の方向が正反対の方向が逆を「す」ことになる。かつて中国の仏教徒は、*tathāgata* の語の訳出にあたり、「如去」と「如来」という二語を案出した。一つの原語に對して「行く(去る)」と「来る」という動作の方向が正反対の意味の訳語を充て、二つの語義を把握しようとしたのである。*tathāgata* とは、真如(真理)に向つて行く者か、真如から衆生を教え導くために来生する者か、が問われる翻訳である。大乘仏教では、大乘精神を表す *tathā+āgata* (真如から来生した人。如来) の意味に理解した。そのため日本では「如来」の言葉が定着し、仏と区別されることなく、仏の別称如同義語の如く用いられている。

釈尊のさとりは言語表現をはるかに超えているため、原始仏典においては、「涅槃」というだけでその内容は説明されない。「如」*tathā*、

*tathāta* (「如」「真如」「如如」などと漢訳された) というだけである。「如」とは、あるがまま、あるがままの状態、そのようなもの、そのようにあること、そのような状態、というような意味である。涅槃の中心的性格を「如」と表現するにとどめ、さとりを言語によって表現することを慎重に避けている。

「比丘たちよ、この四つの聖なる真理は如であり、如を離れず、如にほかならない。それゆゑ聖なる真理は「如」(SN. vol. V. p. 27. *tathā*) 涅槃を表すために何の具体性も持たない極めて抽象的な表現が用いられた。これは、浄土経典が極楽浄土の功德の莊嚴を現世の樂にとよせて詳細に描写し、阿弥陀仏とその報土の優れたありさまを讃嘆する態度とは大きく異なるものである。

如来とは、真如に到達し真如に没入した人でありつゝ真如から来生した人を表す語で、釈尊への尊称として用いられる。「如来・応供・正等覚者」(SN. vol. V. p. 433)。

「如来の十号」あるいは「仏の十号」として、*tathāgata*, *arhat*, *samyaksambuddha*, *vidyāraṇasampanna*, *sugata*, *lokavid*, *anuttara*, *puruṣa-damyasārathi*, *śāstā devānaṃ ca manuṣyānaṃ ca*, *buddha*, *bhagavat*. (Sukhāvativyūha, chapter 3) 如来・応供・正等覚者・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊という尊称が列挙される。

原始仏典のある経には、*tathāgata* の語が人、人間を指す用例を伝えている。Cūḍa-Mālukyaśuttanta (MN. 63, I. p. 426), *Samānābhāraṇa* (SN. vol. V. p. 416) 前掲のチルダース『ペーリ語辞典』の語義を示す例である。

暁良耶舎訳『観無量寿経』には「彼仏多陀阿伽度阿羅呵三藐三仏陀」(大正・十二・三四三上) という文句が現れる。如来・応供・正等覚者の三つの尊称を列挙するが、多陀阿伽度と音写された原語を *tathā-āgata* と解したことを強調するような音写であることを示すものと考えられる。

(17) 【これによつてあるという性質】*idappaccayata* 相依性。原因と結果

の関係によって結ばれていること。

【縁起】 *pañcāsamuppāda* 釈尊が把握した存在の法則。

- (18) 梵天 *Brahmā Sahampati* インド神話における最高神。梵天界に住む。

原始仏典では、仏法堅立にあって重要な場面に登場し、釈尊の決意を促すなど重要な働きをする。

- (19) 梵天 *Brahme* (m, sg, V) これは *Buddhist Hybrid* の語形。

- (20) 衆生への憐れみの情に *yo* *yo* *sattesu ca kārūṇātāṃ pañca*

- (21) 思ひ *viññasaṇṇi*

- (22) 五比丘 *pañcavagīyā bhikkhū* 五人の比丘。釈尊が苦行に励んでいた頃に共に修行した五人の仲間。コーンダンニヤ、ウマツパ、パツティヤ、マハーナーマ、アッサジの五人は最初の仏弟子として記録された。比丘 *bhikkhu* の原意は「食を乞う人」。出家して托鉢する仏弟子を指す言葉となった。

- (23) *Isipatana nigadāya* 仙人の住む所、鹿野苑。

- (24) 別の道を取って去った。 *ummaggāṃ gahetvā pakkāmi*。この道は単に道路を指すのではなく、修行方法を表現するものである。

- (25) 釈尊は五比丘の前に如来として現われることは注目に値する。

ちなみに、原始仏典では、仏の弟子たることを標榜する中で、多数の呼称を用いて世尊を讃嘆する。例えば、AN. vol. I, p. 386. 中には世尊に対する尊称の中に、無上士、如来、善逝、仏が現れる。仏への尊称の中に如来を含まない列挙の仕方もある。たとえば、仏に対する揺るぎない信 (*aveccappasāda*) の内容を「かの世尊は、応供であり、正等覚者であり、明行足であり、善逝であり、世間解であり、無上士であり、調御丈夫であり、天人師であり、仏であり、世尊である」(SN. vol. II, p. 69. *pañcaverahayā*) と伝え、如来と呼ばれなく。

- (26) ようやく *puna*。口承文芸の話法は、「さらに」とただ前へ進めるだけである。

- (27) ここからが釈尊の最初の説法、つまり初転法輪である。中道の教えと四諦八正道の教えが説かれる。

同じ内容が別の經典に伝えられる。 *tathāgatena vutta* (SN. vol. V, p. 420)

- (28) 増谷文雄『阿含經典 第三卷』二五五—二六一頁。聖八正道 *ariya aṭṭhaṅgika magga*

正見 *sammādiṭṭhi* 正しい見方

正思 *sammāsankappa* 正しい思い

正語 *sammāvācā* 正しい言葉使い

正業 *sammākammanta* 正しい行為

正命 *sammājīva* 正しい生き方

正精進 *sammāvāyāma* 正しい努力

正念 *sammāsati* 正しいことに念いをこらす

正定 *sammāsamādhi* 正しいことに心を專注する

- (29) 四諦説。苦・集・滅・道という四つの真理が初めての説法の内容として伝えられる。

- (30) *pañcupādānakkhandha* 人間存在の構成要素である五蘊は、ありとありとして、常に煩惱に取りつかれている(取)から、五取蘊という。人間存在を構成するものすべてをいう。

- (31) 三転十二行相 *tiparivattāṃ dvādasākāraṃ* 四諦の一つ一つの諦について、示し、勧め、証したことを、示転、勧転、証転という。合わせて十二の説き方がなされた。

- (32) 沙門 *samaṇa* 釈尊時代の哲学者・思想家・宗教者・修行者のうち、ヴェータの権威から自由な人たちをいう。

- (33) *veyyākaraṇa*。前田訳では「ちとりのことば」とする。(一一八、一一〇頁)

- (34) 「来たれ、比丘よ」 *ehi bhikkhu*。 *bhikkhu* は単数・呼格。

- (35) 「来たれ、比丘たちよ」 *eha bhikkhavo*。

この表現は、受戒羯度では、⑬ウアツパとパツティヤとが受戒する場面、⑭マハーナーマとアッサジとが受戒する場面のほか、次の箇所にも現われる。(本稿の翻訳には含まれていないためこの版の章節で表示する)

第九章四節 ヤサの友人四人の受戒

第十章四節 ヤサの友人五十人の受戒

第十四章五節 三〇人の善友グループの受戒

第二〇章一九節 ウルヴェーラ・カッサパと五百人の弟子の受戒

同 二十一節 ナデー・カッサパと三百人の弟子の受戒

同 二十三節 ガヤー・カッサパと二百人の弟子の受戒

第二四章四節 舍利弗・目連と二五〇人の遍歴行者の受戒

比丘の複数形 *bhikkhavo* は、これら九回の場面で使用され、複数の者たちが釈尊の面前で直に出家・受戒を求めた時、釈尊自身が同意し入団を許可する言葉として用いられる。*bhikkhu* の複数形には、*bhikkhave* と *bhikkhavo* の二つがある。*bhikkhave* は、呼格の形だけで、仏陀が「比丘たちよ」と比丘たちに呼びかける時にのみ使われる言葉である。古いマガダ語 (Magadhisim) の要素を色濃く残すものとされ、釈尊の実際の呼びかけの言葉を反映し保存したものと考えられている。これに対して、*bhikkhavo* は古い *bhikkhave* の語形が新しくパーリ語に移される時に置き換えられた語形とされる。受戒禱度中に多用されるのは、*bhikkhave* の語形の方である。

仏教の出家教団の内部では、釈尊による比丘たちへの呼びかけには、マガダ語由来の語形が使われたと伝承される。その一方で、複数の希望者の比丘教団への入団を釈尊自身が許可する場合に限り、*etha bhikkhavo* という新しい語形の *bhikkhavo* が使われて伝承されていることがわかる。

アートルン *attan*, *ānān* 自我、個我。永遠不滅の本体としての「個人我」のこと。自己の本体、本質をいう。インド哲学では、ウパニシャッド以来、自己を自己たらしめる実体として想定され探究された。常・一・主・宰にして自在なるものと理解された。釈尊はこれを否定し無我 (*anattan*) とする態度をとった。

## 執筆者紹介

- 青木馨 (客員所員 同朋大学大学院非常勤講師)  
脊古真哉 (客員所員 同朋大学非常勤講師)  
武田龍 (客員所員)  
青木忠夫 (客員研究員)  
伊奈潔 (特別研究員)  
中村薫 (同朋大学大学院教授)  
飯田真宏 (特別研究員)  
市野智行 (同朋大学大学院博士前期課程)  
高橋良政 (日本大学教授)  
小島恵昭 (研究所所長 同朋大学大学院教授)  
池田勇諦 (同朋大学名誉教授)  
小山正文 (研究所顧問)  
金龍静 (本願寺史料研究所副所長)  
田代俊孝 (同朋大学大学院教授 研究科長)  
安藤弥 (所員 同朋大学講師)  
藤 (所員 同朋大学講師)  
Gyana Ratna (客員所員 愛知学院大学非常勤講師)

### 同朋大学佛教文化研究所紀要 第二十八号

平成二十一年三月二十五日 印刷

平成二十一年三月三十一日 発行

名古屋市中村区稲葉地町七―一  
編集者 同朋大学佛教文化研究所

所長 小島恵昭

電話 〇五二―四一一―一三七三

発行所 同朋大学佛教文化研究所  
印刷所 株式会社 一誠社